

千曲市版キャリア教育の提案

～若者が大切にされていると感じる市を目指して～

長野県千曲市役所 柄沢 希実



はじめに

千曲市は、平成 15 年 9 月 1 日に更埴市、埴科郡戸倉町、更級郡上山田町の三市町の合併により誕生した、人口 60,442 人（平成 27 年 9 月 1 日現在、推計人口）の市である。当市も他市町村同様、人口減少・超高齢化という課題に直面しており 25 年後には約 45,000 人になるという推計もある。

人口ピラミッドを見ると千曲市は若年層の他市町村の流出が多いことがわかる。平成 25 年の男女別の「年齢階級別・社会移動の状況」をみると、男性も女性も 15 歳～29 歳の間で転出が超過しており、男性は 30 歳～39 歳で転入が超過、女性も 30 歳～34 歳で転入超過を見せている。2005 年から 2010 年の 5 年間の人口移動のデータを見ると、男女ともには 15 歳～19 歳が 20 歳～24 歳になる時の人口移動は転出人口が上回り、20 歳～24 歳が 25 歳～29 歳になる時の人口移動は転入人口の方が上回る。だが、25 歳～29 歳が 30 歳～34 歳になる時の人口移動は転出人口の方が上回る。

市内には大学や大学院など専門的な教育機関等がないため、15 歳～29 歳の年代に転出人口が増加しても仕方がないだろう。しかし、現在の様子を見ると、Uターンをする人が少ない、もしくは、Uターンしてもすぐに出て行ってしまふことがわかる。若者のUターン率が低ければ人口が減少したままになってしまう。

1. 若者世代におけるUターンの可能性—ヒアリングから気づいたこと

1-1 高校生アンケートの分析から

この章では、若者がUターンする可能性を、高校生への調査と自分と同年代へのヒアリングをもとに考えてみる。

当市では、総合戦略策定にあたり、「千曲市『まち・ひと・しごと創生』に関する意識調査～高校生アンケート～」を実施した。調査の目的は千曲市内の高校生をはじめとする 15～17 歳の若年層における、将来の進路や仕事に関する意識や希望を把握するためである。発送数は 1,000 票で回収票は 438 票（うち無効 1 票）だった。

まずは、このアンケートを分析してみたい。高校生が千曲市をどの様に評価しているのか。魅力的な点については大半が「自然環境の豊かさ」や「働きやすさ」をあげている。愛着の評価をみると、15.6%が「とても愛着を感じる」、53.8%が「愛着を感じる」と回答しており、7割近くが千曲市に愛着を感じていると回答している。住みやすさの評価をみると

26.7%が「そう思う」、57.1%が「まあそう思う」と回答しており、こちらも8割近くが住みやすいと感じていることがわかる。この結果だけみると、自然環境豊かで、どちらかと言えば働きやすく、住みやすい、愛着を持った千曲市と高校生が評価していることがわかる。

1-2 同世代へのヒアリングから

それでは、私と同世代の25歳～30歳代で千曲市にUターンしてきた若者たちは、どのような理由で戻ってきているのだろうか。市内在住のUターンをした28歳～29歳の友人4人にインタビューをしてみた。

Uターンをした理由を聞いてみると「長男だから」「実家が好きだし、親がいるから」「高齢になってから東京では暮らせないと思った」などが出てきた。「仕事があるから帰ってきたのではないのか？」と聞くと「就ける仕事は何かしらあると思ったので、あまり気にしていなかったと思う」という答えが返ってきた。Uターンというと「地域への愛着」や「働ける場所」に注目されるが、私の友人は千曲市が好きという「地域への愛着」や「働ける場所」が原因で帰ってきたわけではなかった。家族と一緒にいたいという思いや「長男」という家族的な役割を果たすためだった。

1-3 様々な人の声を聞きに、「ちくま未来カフェ」に参加

インタビューを行なってみて、千曲市に縁のある人が千曲市に対してどのような評価をしているのか、千曲市への愛着に対する本音がどこにあるのか探るために、当市の産業振興課が開催している「ちくま未来カフェ」に参加した。ちくま未来カフェは「人口減少や少子高齢化の時代に進んでも『大丈夫なまち』を目指し次世代を担う世代を中心に千曲市の未来を考える」がコンセプトのワークショップである。平成27年8月から12月の間に月に1度のペースで開催されたワークショップで多いときは約70名、少ないときでも約20名の参加があった。

ワークショップに参加していた高校生からは、観光や移住定住に力を入れることに対して「今いる人を大切にしたい」という意見がでた。今回のワークショップに参加した高校生たちは強制的に参加させられているわけではなく、日頃から地域活動を行なっている高校生だった。このような高校生の発言に感動して、さらに話を聞いていると「自分たちのできることで地域に恩返しをしたい」と言ってくれた。高校生たちも、地域の人が若い人の力や発想を求めているということを感じたため「何か企画して地域を盛り上げたい」という考えになったようだった。高校の先生は、控えめだった生徒がまちづくりにかかわることで、積極的になり「地域のために」という気持ちが出てきたのではないかと話してくれた。

1-4 本レポートで考えたい論点

このことから千曲市に対する愛着を育てる上で目指す姿は、「ちくま未来カフェ」で出会った高校生のように地域や人と係わっていく中で、「千曲市で私はこんなことができる、こんなことがしたい、こんなことができるようになった」と思える場を作っていくことでは

ないだろうか。そして、高校生が話してくれたように「今いる人が大切にされている」と感じるようになれば、将来Uターンする若者も増えてくるのではないだろうか。そこで、本レポートでは、千曲市外に転出するまでの世代にあたる小学生から高校生を対象としたキャリア教育のあり方を考えたい。

2. 千曲市のキャリア教育の現状と課題

2-1 キャリア教育とは

キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立にむけ、必要な基盤となる能力や態度を育てキャリア発達を促す教育である。ここでいう「キャリア」とは職業のことだけではなく、人生の中で経験する社会的な役割や立場のことも指す。人生の中で経験する社会的な役割を、責任を持って果たす力の発達を促すためには、様々な種類の様々な経験が必要となってくる。職業体験は、その様々な経験のうちの1つである。

今回私が注目したいのは、キャリア教育の中でも、「小学生、中学生、高校生が受ける地域からの刺激（経験）」である。そこで、千曲市の学校で行なわれていることを小中学校のことに限ってはキャリアコーディネーターの先生から、高校生については市内高校の先生からお伺いした。

2-2 千曲市がキャリア教育で目指す姿

千曲市のキャリア教育の目標は「千曲市の未来を担う子どもたちを地域社会と連携しながら、社会の一員として自立できるようにする」である。小学校も中学校も共通して、地域の方の協力を得て、体験活動を通して千曲市のよさに気づかせる教育課程の編成を目指している。

2-3 小学生を対象としたキャリア教育の内容

まず、小学校で行なっていることの一例をあげたい。

- ①地域の方を呼んで一緒に活動する
- ②地域の企業の方を呼んで仕事の話をしてもらう
- ③地域企業の職場見学
- ④地域探検、地域学習を通して千曲市の宝（よさ）を発見する。

などである。④は先生によって取り組み方が違うが、小学校1年生は学校内の探検や、2年生は学校からクラスの生徒の家までの道を歩いてみているという。いつも自分がいる場所や歩いている通学路を、友人と「あんなものがある。こんな花が咲いている」と言いながら一緒に歩くことで、新しい発見があり地域の良さを発見する第1歩となる。

また、当市でも9校中2校で長野県教育委員会が取り組んでいる「信州型コミュニティスクール」というものを実施している。「信州型コミュニティスクール」とは学校と地域が「こんな子どもを育てたい」という願いを共有しながら、一体となって子どもを育てる仕組みを持った地域と共にある学校の姿のことである。

「信州型コミュニティスクール」はまだ全校で実施されていないが、子どもが地域の人に育ててもらって体制ができはじめています。

2-4 中学生を対象としたキャリア教育の内容

中学 1 年生は、農家やスーパー、製造業などの地域企業の職場見学及び企業見学を行なっている。次に、中学 2 年生は仕事の責任や楽しさを知るために、職場体験学習を行なっている。市内には 4 つの中学校があるが、4 校中 3 校が 3 日間、4 校中 1 校が 5 日間の日程で実施している。そして、中学 3 年生は地域企業のインタビューを通して、自分の宝（よさ）を発見する。

5 日間職場体験学習を実施した学校では「職場体験学習（Work Work メッセ）発表会」を実施している。お世話になった事業所や中学 1 年生（下級生）保護者の前で生徒たちが体験したことを発表するものだが、発表の方法を寸劇にするなどそれぞれ工夫を凝らしている。発表の経験を通して生徒からは「自分 1 人では間に合わない作業も『こういう発表をしたい』とグループのみんなに伝えてやってもらおうことがあって、グループ活動のよさに気付かされた」「5 分間の中で学んだことをおさめなくちゃいけなかったの、どのようにまとめて発表するかなど大変だった（中略）相手に限られた時間の中で上手に伝えるにはどうしたらいいのか、しっかり考えられる時間になったと思うのでよかった。」などという感想が出ている。

2-5 高校生を対象としたキャリア教育の内容

当市には高校は 2 校あり、高校によって取り組み方が違う。今回は 1 校の取り組みを教えてもらったのでまとめておきたい。

高校生は小中学校時代に受けていたキャリア教育の内容が違うため、あいさつ、電話対応の方法、コミュニケーションの取り方など基礎的なことから行なっているという。また、働くとはどういうことかということ働く人のビデオを観て学習している。その他にも地域の人にどんな人がいるか調べることや、市内の NPO 法人と一緒にシティープロモーションをするなど 1 校では地域との良いかかわりを始めている。その結果「ちくま未来カフェ」で出会ったような高校生たちが出てきた。

2-6 課題は何か～現場の先生たちの声～

小学校と中学校と高校の一連のプログラムを見てみると、それぞれの年代で地域との関わりとそこからの刺激がそれなりにある。しかし、状況を整理してみても今のままでは「千曲市で私はこんなことができる、こんなことがしたい、こんなことができるようになった」と私が思えないのは何故だろう。

お話を聞いていた中で先生達が話してくれた課題をまとめてみたいと思う。

小中学校では、キャリア教育の重要性や職場体験学習の重要性を理解して協力してくれる事業所を増やすことが課題だということ。子どもを預かるということは危険も伴うし、手間もかかるため企業も敬遠しがちだが、「こどもを育てることは未来の先行投資」ということ

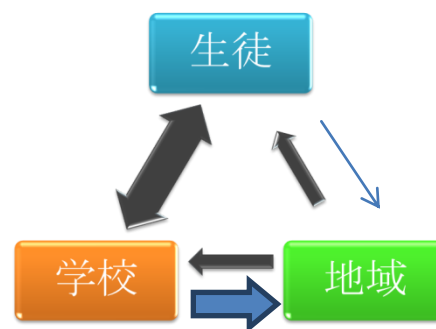
を企業にも理解して欲しいというお話を聞いた。

また、高校は一見地域との関係が良好に見えるが先生の努力の賜物で、先生が変わったら今と同じ様に生徒を地域に出すことは難しくなると感じているそうだ。持続的に地域の人と関れるような仕組みがないことが高校生の課題だ。さらに、高校では、キャリア教育としてビデオを見て感想を書くというようなことが多く、働く人の生の声を聞く機会が少ないという。本当は生の働く人の声が聞きたいが誰が協力してくれるかわからない、千曲市にどんな人がいるかわからないというお話を聞くことができた。

先生達のお話と、現状をもう一度振り返ってみると、関係している主体図1の通りは3者いる。学校（教育する人）と生徒（子ども）と地域の人（企業）の関わりをベクトル方向性と太さで表してみると右のようになるだろうか。

生徒と学校は教える、教わるという関係はあるが、どちらかがお願いする立場にはない。そういう意味では対等だと思う。だが、地域の人と学校の関係では、学校がお願いする機会が多い上に、協力してもらえるケースが多いとは言えない。また、地域の人が協力して下さっても、生徒が地域のことを考えたり、地域の人に協力してもらったことに対する思いを伝えたりする場がまだ少ない。つまり、地域の人に協力してもらっていても、関係性が、生徒と学校の枠から広がりが見て取れない。

【図1 学校と生徒と地域の関係】



生徒と学校の枠から広がりを見せるには既存のキャリア教育の枠からどのようにすれば既存の枠からどのようにすれば既存の枠から一步踏み出すことができるのか。そこで、先発事例として、ゼミの現地研修で訪れた三重県尾鷲市の取組を挙げて、突破するためのヒントを考えてみたい。

3. 先発事例～三重県 高校生地域人材育成事業「尾鷲高校まちいく」～

3-1 「尾鷲高校まちいく」を選んだ理由

「尾鷲高校まちいく」は三重県の高校生地域人材育成事業で、三重県と尾鷲市が連携をして行なっている事業である。私が「尾鷲高校まちいく」を参考にした理由は2つある。

1つ目は、「次代の地域を担うべき若者が地域に定住し、一度出て行っても戻ってくるしかけが必要とされている」ことをきっかけに考えられた、単なる職業体験や地域との関わりを超えた事業だからである。

2つ目は先にあげた「地域と教育」の間で登場する3者の他に、県や市の行政職員の主体的な関わりがあって、事業にも次の様な思いを寄せているからである。

ゼミの研修時に、三重県庁や尾鷲市市役所の担当の方が「戻ってきて欲しいが、そうはいかないこともある。尾鷲の課題と良さを知ってもらい、自分の言葉で話せるようになることで市外、県外に出るときに、子どもたちが自然と市のPRをしてくれる。地域の事を

知って出て行くのと知らずに出ていくのは子ども達の厚みも違ってくると思う。自分が地元のためになにかしたい、自分たちでもできることがあると思う『きっかけ』になったらよい」と話してくれた。それを聞いて、千曲市が必要としている仕掛けを作りはじめていると感じた。

3-2 高校生地域人材育成事業「尾鷲高校まちいく」とは

三重県では、県内の高等学校を卒業して、大学に進学した者のうち、8割が県外に流出していることや、高等学校のない地域では中学校卒業の時点で地域外へ転出する場合もあり、若者世代の地域外流出が課題となっている。そのため、次代の地域を担うべき若者が地域に定住し、一度出て行っても戻ってくる仕掛けが必要とされている。「尾鷲高校まちいく」では地域課題を高校生にミッションとして与え、課題を発見し解決方法を提案するという過程を経ながら「次世代の地域づくりの中心人物を担うための人材育成」を行なうことを目的としている。

3-3 「尾鷲高校まちいく」のねらい～尾鷲市役所の担当者の思いを含めながら～

尾鷲市教育ビジョンの中では「幼保小中高」の学びの連携が記載されているが、実際には県立高校である尾鷲高校とは深く関わる事業を行なっていなかった。そのため、地域を知ってもらい地域づくりの中心人物を担ってもらうための人材育成を行なう事業を実施している。尾鷲市では「尾鷲で頑張ってもあかん。都会に出てがんばれ!」という家庭内教育が蔓延している。そのため教育に関しては偏差値の高い学校へ通わせることが親のする仕事(人生)となっている。結果として子どもたちは、高校から他地域へ進学する子どもが増えている。子どもたち自身も「尾鷲市=生活する場所ではない&生活はできない」と感じている。

このような状況を打開するためには、「尾鷲市に帰ってきてもいいんだ、尾鷲市にはまだこんな素晴らしい資源が残っているんだ」ということを学んでもらいたかったそうだ。そのため、「尾鷲高校の高校生に地域課題をミッションとしてあたえる」という手法をとりながら、次世代を担う人材育成をおこなっている。

3-4 「尾鷲高校まちいく」にかかわる人々とその役割

本事業で特徴的なのは関わる人の多様性であるため、関係している機関と役割を記す。

【表1 「尾鷲高校まちいく」にかかわる人々と役割】

関係者	役割
三重県	補助金の交付。尾鷲市を含む南部地域の地域づくり。
尾鷲高校と 校長先生 (尾鷲市出身)	他地域への学生流出を防ぐためにも魅力ある高校づくりに力を入れている。そのため、本事業に関しても積極的に一緒に活動をしている。

地域	地域課題をミッションとして生徒に提供。フィールドワークでは子ども達の案内役として参加。
P T A	平成 27 年から最終発表に参加し、子どもたちがどんな勉強をしているか知ってもらった。積極的な参画と尾鷲高校の魅力などを下級生の P T A などに発信してもらうことを今後期待している。
大学生	担当リーダー（詳細は後述）

3-5 平成 26 年度「まちばなプロジェクト」の進め方

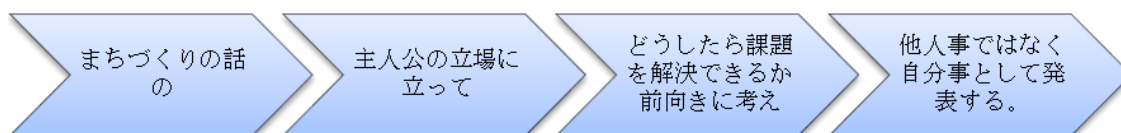
「尾鷲高校まちいく」がどのような手法でとり組まれているのか、平成 26 年度に実施された「まちばなプロジェクト」を紹介したい。平成 27 年度の「尾鷲高校まちいく」は、前年度に行なった「まちばなプロジェクト」を反映したものであり、両者の内容は一部を除いてほぼ変わらない。

【表 2 「尾鷲市まちばなプロジェクト」と「尾鷲高校まちいく」の違い】

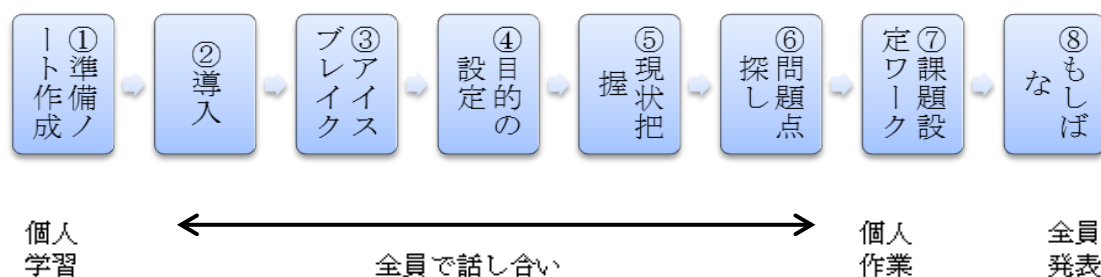
	尾鷲市 まちばなプロジェクト	尾鷲高校まちいく
内容	同じ	
事業年度	平成 26 年度	平成 27 年度
協力大学	慶應大学	三重大学
事業名の由来	まちの話をする→まちばな	まちに育ててもらおう、まちを育てていく→まちいく

「まちばな」とは以下の内容のプログラムを以下の手順で実施するものである。

【図 2 まちばなプロジェクト プログラム】



【図 3 まちばなプロジェクト 手順】



まちばなプロジェクトは、「既存の高校のカリキュラムにまちづくりのための人材育成に取り組むことは高校の大きな負担になる」という課題や「受験勉強等で時間が限られている」という高校や生徒の負担を考え「短時間で地域発見解決思考と当事者意識を醸成する」ことを目指している。手順の中で特徴的なものや、わかりにくいものについて補足を加え

たい。

- ①準備ノート…短時間で参加者と話し合をするために事前に個人が情報を整理し自分の考えを準備するために作成する。
 - 手法…ケース教材、ヒアリング、フィールドワーク等で情報収集する。
 - まとめる内容…「実現させたいこと」「目的を実現させるための問題点(課題)」「自分が当事者だったらどの問題に注目しどう解決するか」
- ②導入…授業開始にあたり、自己紹介やまちばなの意味、目的、参加の仕方の説明
- ④目的の設定…まちづくりの主人公の思いや目指していることを確認し、何のために話し合うのか、何を実現するために解決策を出すのか全員で共有。
- ⑤現状把握…問題を導くために現状を出し合い把握する
- ⑥問題点探し…目的と現状の差から問題点を導き出し更にその問題がなぜ起きているのか考え、課題となる問題点を探す。
- ⑦課題設定ワーク…⑥でみんなで出した課題の中から、自分が取り組みたい問題点を抜きだし、自分の課題設定をする。その上で、課題に対する解決策を考え、スピーチの準備をする。
- ⑧もしばな…「もしも私が〇〇さんの立場だったら、△△を実現するために、□□の問題をこのように解決します。」とビデオカメラや聴収の前で2分間スピーチする。

まちばなプロジェクトの基本的な流れについて記したが、その中で工夫されている点を特に2点感じたので記したい。1点目は、話し合いをスムーズに進めるために②～⑥の話し合いのリーダーを大学生が行なっているということだ。2点目は、②～⑥の作業内容をチームの皆が共有できるように、話し合の内容をまとめていることである。本プロジェクトは「当事者意識をもつ」が1つのキーワードになっているため、⑦の作業の課題設定から課題解決までが1人で作業できるように意識して、黒板等にリーダーが書き出している。

3-6 尾鷲市まちばなプロジェクトやまちいくに関わる上で行政職員が意識していること

先進事例地を参考にする上で、同じ行政職員の方が意識していることをお伺いした。市役所の方は「子どもたちにはとにかく尾鷲市についてもっと学んでもらいたい」という思いで取り組んでいるようだ。また、「地域ではまだ活かされていない地域資源があり、それを活用して地域づくりを行なっている人がいる。その中に自分たちも飛び込むことができる『気づき』を行ないたい」という思いで実施されている。行政職員の方の地域や子どもたちやプロジェクトに対する思いがとても明確である。

3-7 尾鷲市まちばなプロジェクト後の生徒の変化～プロジェクト実施の効果を探る～

「尾鷲高校まちいく」や「尾鷲市まちばな」プロジェクトを経て生徒たちはどのように変化したのか。その様子を尾鷲市役所の方にお伺いしたり、地元新聞などを提供して頂いたので、紹介したい。

尾鷲市役所の方は「実際に地域に帰ってきて頑張りたいと思う生徒の割合も増えて

いる」と感じている。また、地元新聞が高校生にインタビューした内容を見ると、尾鷲市まちばなプロジェクトについて「地元を見つめ直すきっかけになった」と述べている。さらに地元の尾鷲について、「高校を卒業したら多くは市外へ出てしまう。尾鷲市は働く場所がない。仕事があれば地元に残ると思う。尾鷲のある東紀州は熊野古道が有名。だから観光振興に力を入れてくれる人に当選してもらいたい。雇用が生まれれば尾鷲に残る人も増えるのではないか。」と語っている。

まだ2年目の事業のため例えばUターン者が何人いたかという様な数値的な評価は出ていないが、本事業を実施したことにより、地域に無関心だった子どもたちが、「地域に帰って頑張ってみよう」と思うようになったり「こういう地域にしたい。こんな人が必要だ」と考えるようになってきている。

4.先進事例地と千曲市の相違点

【表3 先進事例地と千曲市の相違点】

	高校生地域人材育成事業	千曲市
対象	尾鷲市、紀北町（尾鷲高等学校）	各校の裁量で判断
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な組織や関係者などを巻き込むことができる地域づくりの人材育成 ・尾鷲市について学び、「尾鷲に帰って来ても良い」「まだこんな地域資源がのこっている」ということを知ってもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ、電話対応の方法、コミュニケーションの取り方など基礎的なことを学ぶ ・働くとはどういうことかということを知る
方法	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の現状や、地域資源等の発見・活用について知見を深める ・実際に地域が抱える課題をミッションとして与え、地域住民との対話などから詳細な情報を収集し、課題の解決策を考える 	不明確（以下は実際の取組を記述） <ul style="list-style-type: none"> ・産業振興課などと一緒に市のPR活動を行なう。 ・千曲市にどんな人がいるかまとめる。
関係者	<ul style="list-style-type: none"> ・大学機関 ・高校生、学校長、教頭、担任 ・尾鷲市、紀北町の各地域、区長 ・行政（三重県、尾鷲市、紀北町） 	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人エリアネット更埴 ・商工会議所 ・行政（市 産業振興課など） ・屋代南高校（生徒、担任）
行政の関わり方	<ul style="list-style-type: none"> ・事業主体 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的ではない

先進地事例と千曲市の事例で異なる点をまとめた。千曲市は高校生に対して明確な市としてのスタンスは示してはいないし、市がどのように高校生に育てて欲しいかという像を

持っていないようだ。反対に三重県は「地域づくりのできる人材育成」と明言している。また、もう1点大きく異なることは関わる人の多様さである。特に行政の関わり方が違う。先進地は行政が仕掛け人であるが、千曲市は行政が仕掛けるというところまで役割を果たしていない。千曲市行政の立ち位置は子どもたちを地域の一員としてサポートするという協力者的な要素が強い。特に、学校側の協力体制や県からの協力の有無は大きく違うところだ。

このような比較から今後の千曲市に必要なことは「どんな人材を育てたいのか、どんな人材に戻ってきてほしいのか」という明確なビジョンを持つことと、市のビジョンを教育現場に反映させるために行政主導で小学生から高校生に地域に関する知見を深める仕掛けをしていくことが必要とされている。

5. もしも先進事例地の仕掛けを、今の千曲市で実施したら～やるべきことの洗い出し～

高校の先生にお話をお伺いしている時に高校生はすでに「地域の人を知る」という活動を行なっているそうだ。尾鷲市では実施していないが、「まちばな」でもまちの主人公のヒアリングから始める手法もある。この手法を見ると、地域を自分事と考えるところまで、実は私たちもあと一歩のところまで来ているが、実施の方法等が異なっているため、「まちばな」で狙う様な効果が得られない様感じる。

【表4 「まちばな」と「千曲市の人を知る活動」の比較】

異なる点	まちばな（ヒアリング）	千曲市の人を知る活動
まちづくりの主人公	・多くても、関連のある人数人	・様々な人を知る
成果	・解決策 ・課題を自分事として考える	・地域の人を知り地域を知る ・キャリア形成
狙い	・当事者意識の醸成 ・課題発見解決思考を育てる	・課題発見解決思考を育てる
ファシリテーター	・大学生（話合に慣れている）	・高校生（話合いに不慣れ）
発表のしかた	・自分で話す	・模造紙等にまとめて張り出す

以上の様に整理すると、千曲市にないもの、千曲市にあるもの、もう少し工夫が必要なものが見えてきた。

6. 千人の^{くまもの}曲者プロジェクトの提案

～まちばなを実施するための前段階としてまちづくりの主人公をしる～

「ちくま未来カフェ」でまちづくりに尽力をしてくれている人がいることや、地域について思っている人がいることはわかった。だが、現段階では出会っただけなので活動内容やどんな思いで活動しているのか詳しくは知らないため、「まちづくりの主人公」がいるかと言われたときに私は口ごもってしまう。「地域に戻って来てほしい」「地域で活躍して欲

しい」と思いながら、市職員が「地域に戻ってきたらこんなことができる。こんな人の様に活躍することができる」と紹介できないのは矛盾している。私の様な職員は少なくないだろう。

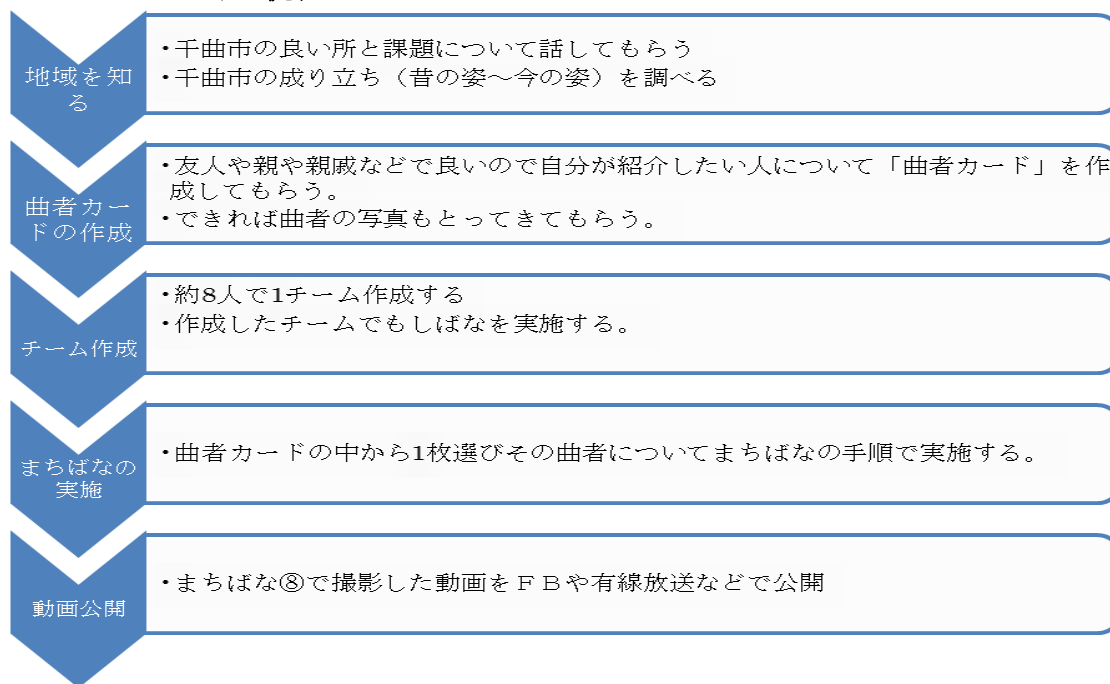
そこで実施したいのが当市の高校生がおこなったように、「若手職員が地域の人のことを知る」ということである。その活動を「千人の曲者プロジェクト」と呼ぶ。この言葉は、以前、高校生が地域の人について調べてまとめたものを校内で展示するという活動を授業の一環として行い、生徒と先生が活動の振り返りを行なう中で、高校生の中から「千曲市だから、曲者を千人集めたらどうか」というような意見が出てきて、「千人の曲者プロジェクト」という言葉が出てきたそうだ。ちなみに、「千人の曲者」という言葉は「千曲市」という市名と掛けてある。今回は提案プロジェクト名として拝借する。

6-1 千人の曲者プロジェクトを行なう目的と対象者

本プロジェクトを行う目的は、①まちばなを実施する上で必要な「まちづくりの主人公＝曲者」を知り②大学生に代わるファシリテーターを育てること③継続的に行う拠点をつくることである。

実施対象者は主に若手職員と「参加を希望する高校生」である。大学生に年齢が近い若手職員や、高校生をファシリテーターとして育てることで、大学生の協力を得られない点を補うことを狙っている。また、若手職員だけでなく高校生も巻込んだのは、学校の協力はすぐに得られないので、授業の一環として組み込んでもらうことは難しいことが予想される。だが、希望者からということであれば「ちくま未来カフェ」に参加してくれた高校生がいるように無理なことではない。

6-2 プロジェクトの流れ



●地域を知る。【全員活動】

まず始めに千曲市の解決しなければいけない課題や伸ばしていく点を皆で共有する。また、千曲市の成り立ちや昔の姿を知り、どんな土地なのかということかも共有する。方法は書籍で調べたり、詳しい職員に話しに来てもらう。

●曲者カードの作成【個人活動】

別紙1の様な「曲者カード」を作成する。この作業で狙うことは、高校の先生がおっしゃった「地域にどんな人がいるかわからない」という課題をクリアするためである。身近な人に「どんな仕事をしているか」ということや「どんな生き方をしているか」にスポットをあててインタビューしてもらい、曲者カードにまとめる。今回実際に私が高校生になったつもりで、友人を曲者としてインタビューをしたものを例として記した（参考資料1）

●チーム作成【全員活動】

まちばなの適正人数は10人だ。少なくとも5人、多くても20人のチームが限度だと記されている。当市は職員の自主勉強会が月に1回ほど実施されているが5人ほどのチームが2チームはできる。高校生も未来カフェに6人ほど参加していたので、1チーム8人とした。

●まちばなの実施【チーム活動】

チームで深めてみたい曲者を1人選び、まちばなを実施する。本工程で狙うことは、ファシリテーターとなる人が「まちばなはどういうものか」ということを体感してもらうためである。また、まちばなの⑧の過程の手法は2分間の動画をビデオで撮影するという手法をとる。

●動画公開

動画を公開する目的は曲者を宣伝するという効果と、高校の先生がおっしゃった「地域にどんな人がいるかわからない」という課題を解決することを目的としている。文章は読むのが大変だが、動画は作り方によっては楽しく曲者を知ることができるため動画公開という方法を選んだ。

●その他補足

ファシリテーターとしての力や、コミュニケーションの力はすぐにつかないので、チーム作成～動画公開までの作業を繰り返し行う。

6-3 千人の曲者プロジェクトへの思い

以上のような流れで千人の曲者プロジェクトを実施し、まずは学校に「まちばな」と「まちいく」を提案できる状態に準備をしていきたい。また、小学生や中学生では高校生のような話合は難しいと思う。現在当市のキャリアコーディネーターの先生は職業体験に協力してくれる企業を増やすことにも尽力されている。千曲市に縁のある曲者を集め、職業体験に協力してもらえるように働きかけることで、小学生や中学生にも地域で活躍する人の姿を見てもらうことができる。地域の中で働くことのイメージを持つきっかけにもなるだろう。そのため将来的には職業体験の場にもつながるように発展させたい。

7. 提案に対して私ができること

一番の目的は7章に記したように、「まちばな」を実施し「まちいく」を実施することである。まちばなを実施する上で足りないと思われる部分を千人の曲者プロジェクトで補完する。大きいスケールで言えば千人の曲者プロジェクト自体が私ができることである。そのため、ここでは私1人でできることやしなければいけないことを述べたい。

まず、仲間を集めることである。一緒にファシリテーターとして成長してくれる人、一緒に地域について学んでくれる人を集めることである。千人の曲者プロジェクトは対象を若手職員や高校生としている時点で業務中に仕事として実施しにくい。また、本プロジェクトは曲者とつながるといことも一つの目的としているので仕事として行った時点で失敗すると思う。そのため、まずは少人数の仲間と地域遊びを行ない、地域を楽しみながら知り、楽しみながら知った地域の様子を伝えるということを始め、まわりの人から「あの人が地域で面白そうなことをしているな」と思ってもらうことから始めたい。楽しみながら地域を学ぶ私達の姿を見て、一緒に活動してみたいと思う人を沢山つくるのが、私のできることである。また、様々な曲者が参加しそうな地域イベントに参加することである。今回もちくま未来カフェに参加したことで高校生や先生に出逢い解決したい課題を絞ることができた。地域を知る有効な手段は沢山の曲者達に出逢うことだと思う。そのため地域へ飛び込むということも行なっていきたい。

8. おわりに

今回、本レポートを書くにあたって私は地域のことを何も知らなかったということに気付いた。だが、それはとても大切な気づきだった。何も知らないということに気付いたのでインタビューから開始し、課題発見解決、自分ができることを考えることができた。また多くの方に協力をしてもらい、地域の人に助けてもらいながらこのレポートを書くことができた。「まちいく」の要素を少し体験したような気持ちだ。

本レポートを書く前に「みんな幸せだったら良い」と漠然としたことしか言えなかった私が『千曲市でこんなことができるようになった』と言える子ども達に育てて欲しいと言えるようになった。そのため、子どもたちにも地域課題を自分事として考えることで地域への思いを深めると言うことを経験して欲しいという思いが強まった。尾鷲市役所の柳田係長、キャリアコーディネーターの小瀧先生、屋代南高校の山口先生、生徒の皆さんには沢山のご協力を頂いた。本当にありがとうございました。皆さんに育ててもらったので、少しでも恩返しできるように「まちいく」まで実施できるように頑張りたい。

【参考資料1】

くせもの 曲者カード

曲者の写真

【曲者No1 ひらつか じゅんこ】

●職業 サロナーゼ（自営業）

自宅でお菓子作りや料理（飾り巻きずし）の
レッスンを開催しています。

●性格 マイペース

●出身 長野市

【こんなことを質問しました！】

Q1 なぜ、サロナーゼになろうと思ったのですか。

A1 理由は2つあります。1つめは、好きなことや得意なことを活かしたかったから。何かを作る事、教えること、人に会うことが好きな私にぴったりだったから。2つめは自宅で自分のライフスタイルに合わせ、仕事をできるから。結婚をし、仕事を持ち、今後子どもができることを考えると、ペースを調整しながら働けるサロナーゼに魅力を感じました。

Q2 今、こんな仕事をしたい！こんな人と知り合いたい！こんなことで困っているということはありませんか。

A2 子どもたちや子育てママさんにレッスンしたいです。こどもたち（3歳～18歳）は作る楽しさをしり、集中力や芸術センスを養って欲しい。子育てママさんには、日頃の家事や子育てで溜まるストレスを発散し、リフレッシュしてもらいたい。そのため、困っていることはどうしたら、こどもたちにレッスンができるのか、レッスンの機会を設けることができるのか知りたい。長野県民はレッスンに通うということに抵抗があるので積極的になって欲しい。アイシングクッキーや飾り巻き寿司、私のサロンの認知度をもっとあげたいです。

Q3 サロナーゼという職業を通じて人に伝えたいことはありますか

A3 子育てママさんに伝えたいです。子どもがいるから仕事ができない、子どもがいるから好きなことができないと思うのはもったいないと思います。好きな事を仕事にし、自分のペースで働ける仕事があるということを知って欲しいです。